

## 大上の六部さん

この塔は、大上の鉄奉行斬殺事件の犠牲者、長谷川一門を祀る廻り堂の横に建っているもので、高さ約一、五メートルもある大きなもので前面には次のように刻んである。

天下泰平 宝暦十四年甲申大三月十二日月清明

梵 大乘妙典 六十六部日本回国

願主〇〇〇〇〇〇〇 雲州仁多郡上阿井 行者 市三郎

六十六部回国とは、俗に六部（ろくぶ）さんと呼び、日本六十六カ国を巡歴し、滅罪經典である法華經を写経して、その一部ずつを六十六カ国それぞれの一の宮に納経するための全国巡礼である。

巡礼とは、定まった順路で霊地（聖蹟）を参拝することである。日本ばかりでなく、インド、キリスト教・イスラム教の国々でも行われた。日本で有名なものは、四国八十八番弘法大師札所（これは巡礼とは言わず、遍路と呼ぶ）四国三十三番観音霊場、近くは出雲札三十三番、仁多郡三十三番、阿井三十三番札等がある。

巡礼は、戦国、泰平如何なる世においても営々として、働きながら心の歴史を築いてきたものである。心だけは誰も犯すことは出来ず、その心の歴史の端が村の辻や路傍、広場にしろされて残されている、これが路傍に刻む石である。

巡礼のうちで滅罪巡礼の色彩の最も濃いのが六十六回国であった。起こりは奈良く平安時代と言われる。江戸時代に入りすこぶる盛んであった。だがこうした新興の厚い六十六部もあったが、多くは故郷に



大上廻り堂

で理解するより実践を重視する考えから生れ出た生活者の事である。

住むことのできない罪を持った者が回国に出た。これは全くの乞食同様であったが、長年の放浪の結果、法力を得て人々の病をなおしたり予言と占いをするようになった。信者が出来ると一カ所に定住したが、多くは地藏堂や観音堂に住み、傍らにこの様な石塔を建て村人の祈祷や相談に応じながら一生を送った。

この阿井の塔の願主は読み取れないが、行者は上阿井村・市三郎と刻まれている。その人物が如何なる人であるかは不明である。

行者とは、宗教上の修行者で、知識



六十六部回国の碑